

連作交響詩「我が祖国」

B・スメタナ

(曲目解説 原田絢子)

近隣の大国による支配が繰り返され、民族受難の時代が続いてきたチェコ。当時はハプスブルク家の治めるオーストリア＝ハンガリー帝国の支配下にあり、政治的・経済的な支配のみならず、チェコ語は「下層階級の言葉」とみなされ都市部では話すことが許されず、ドイツ語を強いられるなど、社会のあらゆる面でドイツ化政策が進み、チェコの人々は様々な制圧を受けていた。

こうした時代、ボヘミア(現在のチェコ西部にあたる地域)の音楽の要素を芸術音楽として昇華させ、国民音楽として発表した作曲家が、「チェコ国民音楽の祖」と呼ばれるベドルジハ・スメタナ(1824-1884)だ。民族主義の傾向が強い愛国者であったスメタナは、青年期には国外生活を余儀なくされていた。やがて、1860年代に入りオーストリアの圧力が緩み始めると、国内ではチェコ語やチェコ固有の文化が失われつつあることに危機感を抱く知識人たちによる民族復興運動が盛んになっていく。38歳のときにプラハに戻ったスメタナはチェコ語を習得し(スメタナはこの時までドイツ語しか話せなかった)、ボヘミア地方を舞台に、チェコの民謡や舞曲を取り入れたチェコ語のオペラ「売られた花嫁」(1866)を創作して成功を取めた。その後もスメタナは民族色の強い作品を多く手がけたが、その代表的な作品が、1874年から5年もの月日をかけて作曲された、連作交響詩「我が祖国」である。チェコの自然(第2曲・4曲)、神話(第1・3曲)、歴史(第5・6曲)を描き、民族の誇りや祖国独立への思いを込めた、スメタナによる壮大な叙事詩であるこの作品。作品の大半はスメタナが完全に聴覚を失ってから書かれたものだが、一貫した構想に基づいた国民音楽の記念碑的作品は、全体を通して聴いてこそ、その音楽の真髄を理解することができるといえるだろう。

第1曲：ヴァジェフラト (高い城)

「ヴァジェフラト」は「高い城」の意味を持ち、モルダウ河畔にそびえ立つ岩山で、古い言い伝え(建国神話)によればそこにはチェコ史上最古の城があった。伝説的な吟遊詩人ルミールが華やかな竖琴の調べと共に登場し、古の王国の栄枯盛衰を歌いあげる。ハーブの美しいカデンツァ(ヴァジェフラトの主題)には、スメタナの名前のイニシャルB.Sを音名(B=シのb、S=Es=ミのb)に読み替え自身の名を刻み、そのモチーフやリズムがあらゆる場面で繰り返し用いられている。プラハのかつての栄光と名譽がロマンティックに描かれた後、戦乱、敗北、没落と廃墟が表現される。終盤ではチェコの歴史を語る象徴のように冒頭の主題が再び演奏され、過去の物語を静かに回想して終わる。なお、現在この丘には城の遺構、そしてスメタナやドヴォルザークの墓がある。

第2曲：モルダウ

モルダウ川(ドイツ語名。チェコ語名はヴルタヴァ川)に沿ってチェコの風景を7つの場面に見立て、変化に富んだ音楽で美しく描いた作品。スメタナはこの激しい川の流れにチェコの激動の時代をも重ね合わせた。

曲の冒頭ハーブの1音が源流の水の最初の1滴のしずくを、フルート(上昇音形)とクラリネット(下降音形)が二本の源流の交わりを、弦楽器のピッチカートが跳ねる水滴の様子をそれぞれ表現し(1)、モルダウ川の豊かな流れを辿る旅が始まる。ホ短調で始まるモルダウの哀愁のメロディが奏でられ、合流して一つの流れとなる(2)。川を下ると狩人たちの角笛が聞こえ(3)、結婚を祝う村人たちがポルカを踊る(4)。月光で輝く水面を水の精霊が優美に踊り(5)、夜が明けると流れは聖ヨハネの急流にさしかかり、しぶきを上げて水が飛び散る(6)。やがて川はプラハに流れ込み、ヴァジェフラトの古城が見えてきて、最後はエルベ川へと消えていく(7)。

ホ短調で始まるモルダウの哀愁のメロディは終盤ではホ長調となり、力強い希望に満ちた輝かしい主題となる。ここにスメタナは、苦悩の歴史から勝利へと向かうことを願った未来へのメッセージを込めた、とされている。フィナーレではヴァジェフラトの冒頭の主題が引用され、この2曲を地理的・音楽的につなげていることにも注目したい。

第3曲：シャルカ

シャルカとはプラハ北東にある谷の名前で、ここに伝わるチェコの説話「乙女戦争」の女戦士シャルカの物語が描かれている。『シャルカは失恋によって受けた痛手を全ての男性に復讐すること晴らそうと考えた。ある日彼女は、自分の体を木に縛りつけ、苦しんでいるように芝居をする。そこにツティーラトの騎士たちが通りかかる。ツティーラトに助けられたシャルカは、助けてもらったお礼にと酒をふるまう。気を許し、酔っていびきをかいて眠る騎士たち。シャルカは角笛を吹いて味方の女戦士たちを呼び、騎士たちを襲撃。最後にはシャルカの剣でツティーラトも滅ぼす。』という、非常に残忍なストーリーだ。冒頭の荒々しいシャルカの動機は復讐心に燃える怒りをあらわし、このシャルカの動機は、終盤にも襲撃のテーマに姿を変えて現れる。

MÁVLAŠT SMETANA

第4曲：ボヘミアの森と草原より

ボヘミアの豊かな自然がテーマとなっている曲で、スメタナが少年時代を過ごした淡い思い出が盛り込まれている。「見渡す限り水平線につながるボヘミアの平野に立って、祖国の自然の美にうたれる。微風は森にささやき、ふと遠方から村人の踊りの音楽。風はこの響きを運んで歓喜の踊りと音楽は国土に充滿する。』スメタナはこのような標題を書き、チェコの大自然や庶民の素朴な暮らしを表現する。前半は鬱蒼とした深い森の風景、後半では収穫祭・農民の祭りをあらわすチェコ起源の舞曲ポルカが盛大に演奏されて、チェコ民族の賛歌は勇壮に終わる。

第5曲：ターボル

15世紀に起こった宗教戦争時代のフス戦争の戦士たちの英雄的な戦いを讃える作品。この曲と次の「ブラニーク」で一つの物語となっている。「ターボル」は南ボヘミアにある中世の町で、フス教徒の中でも急進派(ターボル派)の拠点とされていた地域。最終的にはフス派の内部分裂によって敗退したものの、フス派の戦いと犠牲はチェコ民族の歴史において忘れてはならない重要なものであった。

ティンパニーの微かな音に重なるように、連続する「D(レ)」の音の特徴的なリズムで重苦しく始まる。続いて重厚なコラールが鳴り響き、宗教改革の先駆者となったフス派の讃美歌「汝ら神の戦士」(訳:汝ら神の戦士なり、神の掟に服従するなり/神のご加護を祈り、神を信じたまえ/汝はついに神とともに勝利を得るだろう)の旋律が、形を変えながら何度も登場し、激しい戦いを繰り返す様子が描かれる。

第6曲：ブラニーク

「ブラニーク」はボヘミア中南部にある山のことで、この山には古くから、国が最大の危機に瀕したとき、救いに現れることになっている愛国の騎士たちが眠っているという言い伝えがあった。先の戦いに敗れたフス派の戦士たちもここに眠っていて、スメタナはここに眠るフス派の戦士の悲願と伝説の騎士の到来を重ね、祖国の勝利と復活を第6曲に描いた。前曲と同じ讃美歌を軸に、戦闘、休戦と平和、最後の戦い、勝利の行進曲が描かれ、ついには騎士たちの勝利が高らかに鳴り響く。最後はホ長調からニ長調に転調し、フス派の讃美歌とヴァジェフラトの主題が同時に回帰して、「我が祖国」全編の壮大な「輪」が閉じられる。